

第83回 獣医学セミナー

補体因子の妊娠期動態と 生殖生理との関連性

日下部 健
(獣医解剖学)

2021年 12月22日(水) 16:00-17:00

iCOVER1階 101

霊長類やげっ歯類は妊娠期に血絨毛膜胎盤を形成し、胎仔組織は母体血液に晒される。一方で、免疫担当細胞、サイトカイン、MHC等は非妊娠期とは異なり、母体免疫系は寛容状態にある。私はとくに補体系の妊娠動態について研究を行ってきた。補体タンパクは主に肝臓で産生され、恒常的に全身に還流している。活性経路は3種類あり、それぞれで自己反応性が制御されている。

妊娠期に補体活性因子adipsinを投与すると、マウスの流産率が増加した。別の流産モデルでは、adipsinが全身的に増加していたが、流産を回避した着床部位では胎盤内のCrryの発現が増加していた。補体抑制因子Crryは正常胎盤においても発現していた。

補体の制御システムはシンプルで理解しやすいが、役者が多く、一方で獲得免疫と関連させると可能性が広がる。関連分野の今後の発展を期待して、分かりやすい紹介を試みます。

★ 教員・学生の積極的な参加をお願いします！ ★

連絡先：三宅（5913）、伊賀瀬（5897）

